

委託事業実施内容報告書
平成30年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(A)】

実施内容報告書

団体名：兵庫日本語ボランティアネットワーク

1. 事業の概要

事業名称	コミュコミュ大作戦！—ボランティアのコミュニケーション能力と学習者のコミュニケーション能力を伸ばすためのプログラム—
事業の目的	本事業は、2つのコミュニケーション能力の向上を目指すことから「コミュ・コミュ大作戦」と名付けた。1つ目の「コミュ」は、学習者の日本語によるコミュニケーション能力を指し、2つ目の「コミュ」は日本語学習ボランティア（以下、ボランティア）のコミュニケーション能力を指す。 地域日本語教育に通う学習者が目指すことの1つに、「日本語が上手になりたい」ということがある。初めて教室を訪れた学習者の多くが、このように言う。学習者たちは、日々の生活の中で、日本で生活をしていくうえで、日本語の習得がどれだけ大切かを痛感している。だから、来日して間もない学習者だけではなく、長年日本で生活をしている学習者も同様の目標を掲げることが多い。 また、ボランティアたちも、教室の活動では、学習者の会話能力を伸ばすための支援をしなければいけないと考えている。しかし、ボランティアたちは、いまだに、どのようにすれば学習者が話せるようになるのか模索している。これは経験の浅いボランティアに限ったことではなく、長年にわたりボランティアを継続している人も同様である。ボランティアたちは、自分が担当する学習者の会話力が少しでも伸びるようにと、さまざまな養成講座などを受講し、支援方法を探している。が、実践で活かすことができず、再び養成講座などに参加する。ボランティアが学習者と教室で活動をするのも、コミュニケーションの1つである。まずは、ボランティアが、コミュニケーションとはなにかを知ることで、学習者と共有する時間をどう使うかがわかるのではないだろうか。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	兵庫県下には、立ち上げから20年ほど継続している老舗の教室が多く、10年以上の経験を有するベテランがたくさんいる。しかし、それらのボランティアたちでさえいまだに学習者の会話力を伸ばすのに苦労している。当団体では、自律学習やクリティカルシンキングなどを取り入れた養成講座を実施し、新しい風を地域日本語教育に取り入れたという自負があった。が、養成講座の受講者や、当団体が開催する日本語教室“知っとう神戸”のボランティアたちから聞くのは、「どうすれば学習者が日本語を話せるようになるか」ということである。 神戸市では様々な機関で研修会などが開催され、学習者との会話の仕方などを学ぶことができる。そのような研修会に熱心に参加するボランティアも多くいるのだが、自分が抱える問題を解決できないようである。 多くのボランティアは、日本語教育に関する知識を持たずに活動をしている。そのようなボランティアたちに向けての養成講座や研修会は、専門的な知識がなくても実践に結び付けられるような仕掛けを考える必要がある。
これまで日本語教育が行われていない市区町村の状況	
事業内容の概要	本事業では、「学習者のコミュニケーション能力の向上」と、「ボランティアのコミュニケーション能力の向上」という2つの目標を掲げた。それぞれの目標を達成するために実施した取り組みを、以下に説明する。 【「学習者のコミュニケーション能力の向上」のための取り組み】 「学習者のコミュニケーション能力の向上」を目指し、次の2つの取り組みを行った。 1. 教材の作成 当団体では平成29年度文化庁委託事業において、『アクティブラーニング型活動への招待—自分で教材を作ってみませんか—』という養成講座のための教材を作成した。そして、その教材を使用し、アクティブラーニングを取り入れた活動のための教材作成の指導を行った。アクティブラーニングとは、学習者が能動的に授業に参加する仕掛けを取り入れた学習方法である。ボランティアが、アクティブラーニングを意識した活動を行うことで、学習者の発言時間を増やすことができる。 本取り組みでは、上の考えをもとに日本語教室で使用する教材を作成した。教材で取り上げるテーマは、文化庁の教材例集を参考にした。 2. 日本語教室の開催 本教室は、平成28年度と同委託事業で当団体が実施した養成講座の受講者たちによって運営されている。ボランティアたちは、学習者の居場所としての教室と日本語を話す練習をする場としての教室ということを意識して、日々の活動を行った。この教室では、本事業で作成するアクティブラーニングを取り入れた教材『知っていますか。できますか。～日本語で話しましょう～』を使用し、学習者が日本語を十分に練習できるよう、そして、自分の考えを言い、自分らしく生きられるように支援することを心掛けた。 【「ボランティアのコミュニケーション能力の向上」のための取り組み】 「ボランティアのコミュニケーション能力の向上」を目指し、次の1つ取り組みを行った。 1. 養成講座 本養成講座では、受講者がコミュニケーションを意識的に捉えることで、自分のコミュニケーションを改善するようになることを目指した。そして受講者は、学習者との活動もコミュニケーションの1つだと考えることで、これまでの活動内容を見直し、今後どのような教室活動をすれば、学習者のコミュニケーションを向上させることができるかを考えた。
事業の実施期間	平成30年5月～平成31年3月（11か月間）

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

【運営委員】

1	石光 潤子	(公財)兵庫県国際交流協会・事業推進部長
2	屋久 和夫	(公財)神戸国際効力交流センター・総務部長
3	井口 洋	(公財)兵庫県国際交流協会・多文化共生課長
4	小林 真由美	(公財)神戸国際効力交流センター・運営課長
5	村上 由記	(公財)兵庫県国際交流協会・日本語教育指導員
6	延原 臣二	東灘日本語教室・代表
7	尾形 文	兵庫日本語ボランティアネットワーク・代表
8	高橋 博子	兵庫日本語ボランティアネットワーク・運営委員
9	櫻井 久子	兵庫日本語ボランティアネットワーク・運営委員



【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成30年6月27日 (水) 10:00～12:00	2時間	(公財)神戸国際効力 交流センター会議室	屋久和夫、井口洋、小林真 由美、村上由記、延原臣二、 尾形文、高橋博子、櫻井久 子	1. 本事業の説明 2. 事業の進捗状況の説明 3. 事業についての意見交換 4. 事業以外の地域日本語教育に関する情報交換
2	平成30年11月21日 (水) 10:00～12:00	2時間	(公財)神戸国際効力 交流センター会議室	石光順子、屋久和夫、井口 洋、小林真由美、村上由記、 延原臣二、尾形文、高橋博 子、櫻井久子	1. 事業の進捗状況の説明 2. 事業についての意見交換 3. 事業以外の地域日本語教育に関する情報交換
3	平成31年3月6日 (水) 10:00～11:00	2時間	(公財)神戸国際効力 交流センター会議室	屋久和夫、井口洋、小林真 由美、村上由記、延原臣二、 尾形文、高橋博子、櫻井久 子	1. 事業終了の報告 2. 本年度の事業に対する意見交換 3. 今後の地域日本語教育に関する情報・意見交換

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	・ ひょうご日本語ネット 事務局((公財)兵庫県国際交流協会)での月一度の会合を実施し、本事業への協力(広報など)を得た。この会合には、兵庫県国際課、神戸市市長 室国際部、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、民間団体、有識者が参加しているため、様々な機関からの協力が得られた。 ・ 当団体の会員 当団体の会員は、個人78名、団体30からなり、多くは兵庫県内の日本語教室やボランティアである。様々な教室から情報収集などの協力(広報など)
------	--

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制	【事業全体】 事業の総括コーディネーターである尾形文が事業全体を指揮した。尾形は事業の企画、中間報告、終了報告を運営委員会で行い、運営委員からの意見を取り入れ、事業を更新した。 【日本語教室】 (公財)神戸市国際交流センターの会議室を借り、教室とした。岡田弘を中心に、平成28年度文化庁委託事業の養成講座修了者が企画・運営を行った。学習者を募集する際の広報は、(公財)兵庫県国際交流協会、(公財)神戸市国際交流センター、及び神戸市近郊の日本語教室に協力を依頼した。 【養成講座】 (公財)神戸市国際交流センターの会議室で実施した。大学での日本語教師養成課程に関わり、かつボランティア養成講座の講師経験がある者(池谷知子、尾形文)を講師とした。また、HNVNの運営委員の櫻井久子が補助者をし、講師たちの講座を補助した。本講座の第9回で実施した実習には、神戸市内の日本語教室に学習者を依頼し、9名の学習者が協力してくれた。 【教材作成】 教材は、本事業の日本語教室で使用するため、その教室に関わるボランティアを中心に教材の内容を決定した。外国人学習者の意見を取り入れることも考え、元日本語教室の学習者である許智仁(韓国人)と吉武莉(台湾人)も教材作成メンバーに加わった。
----------	---

3. 各取組の報告

日本語教育の実施【活動の名称:話すって楽しいね！】										
目的・目標	本教室では、学習者が日本語で話すことを楽しいと感じるようになることを目標とする。 ボランティアは、「教室は学習者が日本語を練習する場」であることを意識し、ボランティア自身の発話を減らすことに注意を払う。 そうすることにより、学習者の日本語での発話が徐々に増え、日本語で話すことに自信が付き、やがて日本社会で日本語が使えるようになり、日本語で自分を表現できるようになる。									
内容の詳細	【活動形態】 基本的に、1対1で活動した。しかし、教室に関わる全ての人同士が気軽に話せるようになることを目指すため、月に2回ほどは、レベル別のグループ活動や、ボランティアも含めた教室全体での活動を行った。									
	【活動内容】 毎回の活動は、本事業で作成した教材『知っていますか。できますか。～日本語で話しましょう～』に拠って進めた。この教材は、文化庁の標準的なカリキュラム案の中の「活用のためのガイドブック」及び「教材例集」を参考にし、その中でも特に日本語でのやり取りが多いと考えた場面や状況を選択した。									
	【日本語学習ポートフォリオの導入】 教室の初日にすべての学習者に日本語学習ポートフォリオに記入してもらった。そして、全20回の活動を終えた時、再び記入してもらった。									
実施期間	平成30年10月2日～平成31年3月5日				授業時間・コマ数		1回3時間 × 20回 =60時間			
対象者	日本語を母語としない日本語学習希望者(日本語レベルは問わない)				参加者		総数 17人 (受講者 11人, 指導者・支援者等 6 人)			
カリキュラム案活用	すべての学習者にポートフォリオを配布し、自己評価をしてもらった。									
使用した教材・リソース	・主たる教材:『知っていますか。できますか。』(本事業で作成した教材) ・その他リソース:各ボランティアが主教材を補足するために作成した資料など									
受講者の出身 (ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	9									
	インド(1)、ニュージーランド(1)									
日本語教育の実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名	
1	平成30年10月2日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	6	みんなを知ろう	1. オリエンテーション 2. 自己紹介(学習者、支援者) 3. ポートフォリオの記入		岡田弘、井畑眞理子、大沼和世、高橋博子	小川未佐子、山本佳代子	
2	平成30年10月9日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	7	病院	学習者のレベルに合わせて、体の名称や病気になったときの医者との会話を練習した。学習者により興味が異なるため、娘のコンタクトレンズの話をする人もいれば、自分のインプラントの経験を話す人もいた。		岡田弘、小川未佐子	井畑眞理子	
3	平成30年10月16日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	3	病院・買い物	・先週の続きを希望する学習者に対しては、病院をテーマに活動をした。自分の症状を言ったり、診察室での医師の指示がわかるかどうかをアクティビティーで確認した。 ・買い物をテーマに活動したペアでは、自分が希望する商品の有無を聞く練習や、どこで購入するかなどを話し合った。		小川未佐子、山本佳代子、大沼和世		
4	平成30年10月23日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	4	買い物	先週に続き買い物をテーマに活動をした。各ペアやグループにより内容は異なり、ある学習者は、レジで支払う際の日本語の練習をした。また他の学習者は、コンビニで「お箸はいりますか」と聞かれた経験から、助数詞について講師に質問をしていた。		岡田弘、小川未佐子、井畑眞理子、		
5	平成30年10月30日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	5	買い物	・久しぶりに顔を見せた学習者や講師がいたので、自己紹介を兼ねて、名前と滞在年数、好きな食べ物を発表することになった。発表の前に、それぞれのペアやグループで練習をし、おやつタイムのあとに発表をした。 ・果物が大好きな学習者が大連から来日する際、スーツケースに果物を入れていたのを「果物犬」に発見された。それを聞いた講師たちからは、麻薬犬だけではなく果物犬もいるのだと感嘆の声があがった。		井畑眞理子、高橋博子	小川未佐子、山本佳代子	
6	平成30年11月6日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	4	買い物・料理	・買い物をテーマに活動をしたグループでは、京都の嵐山で食事をした時、クレジットカードが使えなかったという話があり、日本のクレジットカードの採用率の低さが話題になった。 ・料理をテーマに活動をしたグループでは、1人の学習者が料理をほとんどしないことが発覚した。そこ場にいた講師や学習者からは、材料を切ったり、鍋で調理をすることだけが料理ではなく、電子レンジで温めるだけでも料理と認定しようという話になり、そうすると教材に載せる内容にもレトルト料理などを載せる必要がある、という意見が出て、いつも以上に話が盛り上がっていた。		井畑眞理子、山本佳代子	岡田弘、大沼和世	

7	平成30年11月13日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	5	妊娠・料理	・学習者のひとりの懐妊がわかり、教室全体で妊娠や出産の話をした。 ・話題が料理に変わってからは、新聞のチラシをもとに、食材の話をしたり、その食材を使った料理の話をした。	岡田弘、小川未佐子、大沼和世	高橋博子
8	平成30年11月20日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	5	料理	・きのう、きょう、あしたの料理の作り方を説明する学習者や、体に良い料理の話をする学習者など、テーマは1つだが、学習者の好みによって話題が大きく変化していた。 ・次回、「100円ショップで売っているお気に入りの物」というテーマで発表をしてもらうため、各グループで100円ショップについて話をした。	井畑真理子、山本佳代子	岡田弘、小川未佐子
9	平成30年11月27日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	4	発表の練習・料理・悩み相談	・100円ショップの品物についての発表をする予定だったが、発表の練習だけで終わった。 ・1つのグループでは、国に帰ったら体調が悪くなるという学習者に、講師たちが自分の経験から体調を戻す方法を提案した。こんな話ができるのはこの教室しかないという学習者の言葉に、講師たちもじっくり話を聞いていた。 ・別のグループでは、日本語が出てきにくい学習者が料理の作り方を説明するのを、こちらもしっかり聞いていた。	小川未佐子	井畑真理子、山本佳代子、大沼和世
10	平成30年12月4日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	4	100円ショップのお気に入り	〈前半〉 ・教室の人全員が、100円ショップの商品の中から自分のお気に入りを発表した。以下が取り上げられた品々である。 学習者:筆ペン、会計簿、綿棒、メラミンスポンジ、支援者:らくらくゴムベルト、ペットボトル洗い、洗顔泡だて器、手帳、霧吹きスプレー、壁に貼るシール ・各自の実演入りの発表となり、盛り上がった。 〈後半〉 ・あみだくじで学習のペアを決め、先週の続きの「料理」をテーマに活動した。	岡田弘、井畑真理子、大沼和世	高橋博子
11	平成30年12月11日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	4	最近のことについて話す	・この日は、教材から離れて会話をした。 〈前半〉 「最近のことを話そう」というテーマで、学習者も支援者も全員で話すことにした。 〈後半〉 ・各ペアごとに、学習者にやりたいことをした。日本の小学校3年生用の国語の教科書の朗読をしたい学習者には支援者がそばについて、読み方や意味をサポートした。また、前半の発表で話した「年賀状」について続けるペアもいた。	山本佳代子	岡田弘、小川未佐子、井畑真理子
12	平成30年12月18日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	3	中国について	学習者が中国人ばかりだったので、中国旅行から帰国した支援者が飛び入りで参加し、中国・香港旅行の報告をした。それに対して、学習者たちが、中国に関する話題を広げていった。	小川未佐子	山本佳代子、大沼和世、(飛び入り:岡田弘)
13	平成31年1月8日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	4	災害について	各ペアで、災害について、それぞれの学習者に合わせて活動をした。学習者により、災害の種類などの理解が違うので、学習者からの質問に沿って進めた。子供を持つ学習者からは伝染病が出て、インフルエンザが流行ると学級閉鎖になるという話から、台風でも学級閉鎖になるなど、話題が行ったり来たりする様子がうかがえた。	岡田弘、井畑真理子、大沼和世	
14	平成31年1月15日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	4	・災害について ・次の発表について	・最初にコーディネーターから、次の発表の提案があり、教室の全員で発表の日にはちや、発表のテーマなどを決めた。 ・活動は、先週に続き「災害」をテーマに行った。この日は、どのペアも、主に「避難」について話した。避難場所や避難時に持っていくものなどについて学習者と支援者で考えた。	山本佳代子	岡田弘、小川未佐子、井畑真理子
15	平成31年1月22日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	4	受験生を持つ学習者を中心に会話	・高校受験の娘を持つ学習者が、精神的に辛いということで、この日は、みんなで彼女の話を聞いたり、体験談を話したりした。 ・来週の中国茶についてみんなで話し合った。	小川未佐子、井畑真理子	山本佳代子、大沼和世
16	平成31年1月29日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	3	中国茶を飲む	・1人の学習者が中国茶の先生であることを知った支援者たちから、ぜひ、中国茶を点でてほしいとお願いした。それがこの日に実現した。中国茶の先生である学習者が、高価な茶器やお茶を持参し、教室のみんなに振舞ってくれた。3種類のお茶の違いについての日本語での説明があり、この日は、支援者が中国茶を学ぶ日となった。 ・中国茶を学んだあとは、最終日の発表について各ペアやグループで話し合いをした。	岡田弘、井畑真理子、大沼和世	(飛び入り:高橋博子、小川未佐子、山本佳代子)
17	平成31年2月5日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	5	・最終日の発表内容についての話し合い	・最終日の発表の内容を、台湾チームと中国チームに分かれて話し合った。学習者たちが自由に話し合をし、支援者は質問に答えるだけだったので、この日は講師はいなかった。		岡田弘、小川未佐子、井畑真理子、山本佳代子

18	平成31年2月19日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	4	・3月5日の教室外学習のオリエンテーション ・冠婚葬祭について	〈前半〉 ・3月5日に行く「人と未来防災センター」の説明を講師がした。 ・以前、学習者から冠婚葬祭やお見舞いなどについて知りたいという希望が出ていたの で、この日に学習した。	小川未佐子、 井畑真理子	大沼和世
19	平成31年2月26日	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	6	学習者の発表	発表内容 ・二人組での発表「台湾の食べ物と名所」 ・一人で発表「中国の教育について」 ・一人で発表「中国の結婚式」 ・一人で発表「中国の8大料理」 ・一人で発表「世界遺産の四川省九寨溝」	岡田弘	小川未佐子、井畑真理子、山本佳代子、大沼和世
20	平成31年3月5日	3	教室外活動「人と防災未来センター」	5	防災について学ぶ	会館のスタッフの日本語による説明を聞きながら、阪神淡路大震災の再現フィルムや南海トラフのジオラマなどを見た。		井畑真理子、山本佳代子、大沼和世、高橋博子

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第16回31年1月29日】

〈中国茶を飲む〉

学習者のひとりが中国茶の先生であることを知り、中国茶を飲む会を企画した。中国茶の先生は、自宅から高価な茶器や、中国帰国した際に購入してくる高価なお茶を持参し、支援者たちにお茶を振舞ってくれた。

お茶は3種類で、古いほど体に良いそう。1番古いお茶は「宝」、次の古いお茶は「葉」、一番新しいお茶は「ただのお茶」という説明を聞きながら、支援者たちはお茶の先生が入れてくれた順にいただいていた。まずは、「ただのお茶」、次に「葉」、最後に「宝」を飲んだ支援者たちからは、やっぱり「宝」がおいしいという声が多かった。

今回のような、学習者が支援者に自分の国の文化や自分が得意なことを伝える活動は、学習者がこれまで学習した日本語を駆使して自分の言いたいことを表現する機会であり、それにより、学習者は自分にとって必要な日本語を自覚することとなると考えられる。また支援者から出る質問や感想も、教科書から離れた現実社会の者であるため、日本語学習の機会としては有意義である。

中国茶の先生



中国茶の先生が説明できない内容を
通訳する、日本語
レベル上級の学習
者



○取組事例②

【第19回平成31年2月29日】

〈私の国の〇〇〉

この日は、2人の台湾人学習者と4人の中国人学習者による発表を行った。発表形式は自由で、1人で発表をする人もいれば、一人で発表をしたあと、グループやペアで複数回発表をする人もいた。

発表のテーマは、「台湾の食べ物と名所」、「中国の教育について」、「中国の結婚式」、「中国の8大料理」、「世界遺産の四川省九寨沟」だった。どの発表者も事前に時間を掛けて準備をしており、写真や地図などを持参し、丁寧に発表をした。

支援者たちは、日本語の上達があり早い学習者に関して、発表がうまくできるかどうか、そもそも発表をするのかどうか心配していたが、当日は自分のペースでゆっくりとではあるが、すべて日本語で発表した。日本語の上達は早くはないが、いつも笑顔で教室に入り、笑顔で丁寧に「お疲れさまでした。」と帰っていく彼女らしい、丁寧な発表だった。

日本語が良くできる学習者たちは、話しても話しても話足りないという様子で、用意したテーマ以上のことを話してくれた。

支援者の中には、熱心にメモを取る人おり、近くの国なのに、実は知らないことばかりだということを改めて感じた。良い勉強になったという感想が聞かれた。



○取組事例②

【第20回平成31年3月5日】

〈防災について考える……「阪神・淡路大震災記念 人と未来防災センター」を見学〉

第13回と第14回の活動で災害について学んだ学習者と支援者は、第20回の最終日に、実際の地震の体験ができる「阪神・淡路大震災記念 人と未来防災センター」を見学した。

支援者たちは全員阪神淡路大震災の経験者だが、学習者たちは初めて当時の写真や再現フィルムを見た。その惨状にいつもはおしゃべりな学習者たちも、この日は口数が少なく感じた。センターのスタッフによる免振装置の有無による違いや、ミニチュア模型による液状化の実演があった。スタッフの日本語は、外国人への配慮がない普通の日本語だったが、模型や実演による説明は、日本語があまりよくわからなくても理解しやすかったようだ。

この日は、防災センターを見学する前に、隣の建物の中にあるJICAのレストランに寄って、みんなでランチを食べた。食事をしながら学習者たちは日本語でたくさんおしゃべりをしていて、食事後、ある支援者がお手洗いから戻ってきた際、「お待ちせしました。」という、それを見ていた学習者たちは、お手洗いから戻ってきたら、さっそく「お待ちせしました。」を使っていた。学習者たちがどんな場面も日本語学習の機会と捉えているようだ。



(2) 目標の達成状況・成果

最終日のアンケートでは、6名の学習者のうち、日本語の上達について、上手になった＝3名、まあまあ上手になった＝1名、変わらない＝1名、上手になっていない＝1名だった。また、生活については、できるようになった＝2名、少しできるようになった＝3名、変わらない＝1名だった。当プログラムに関しては、満足している＝5名、まあまあ満足している＝1名だった。

学習者からは次のような感想や意見があった。「だんだん日本語が上手になりました。いい経験になりました。」(上達が遅いが、熱心に教室に通ってくる学習者)、「これからは会話と文法が上手になりたい。」(2019年11月に日本で第1子を出産予定の学習者)、「近い将来、また一緒に勉強したい。」(来日2年ほどだが、娘が2019年4月から高校生になるため、保護者としての知識(保護者会の服装など)や先生とのやり取りを目標にしている学習者)、「再開してほしい」(来日して8年ほどなので日本語でのやり取りはできるものの、そのほとんどを常体で話す学習者)、「校外学習をもっとしたかった」(日本人を配偶者に持ち、夜間中学で日本語を学んだ学習者。本教室では通訳もしている)、「もっと参加したかった」(幼稚園に通う娘を持つ学習者)。

本教室は、日本語を教えることを第一の目標にはしていない。まずは、教室に来る全員が知り合いになり、他では話せないことを話し、誰にも聞けないことを聞ける教室を目指している。そのため、学習者のほとんどが他の日本語教室にも通い、他の教室では教科書を使った日本語学習をし、本教室では、日本語学習に関する質問や、生活の悩み相談をするというように、複数の教室を使い分けていることがわかった。本教室のボランティアたちも、2年前の開室当初は、どうすれば日本語をうまく教えられるのかに注意を向けていた。しかし、学習者からの「宿題」をこなすうちに、「日本語を教えるだけが日本語教室ではない」と気づいたようだ。

今後は、今以上に学習者が日本語教室を利用する目的が多様化すると考えられる。本教室は、今年度得たことをもとに、多様な学習者の多様な目的に応えられるように継続していきたい。

(3) 今後の改善点について

本教室には、3か国11人の学習者が登録した。しかし、最終的には、中国の6人だけしか残らなかった。途中で入室を希望した学習者の中には、常連の学習者同士の団結力のため教室に来なくなったと推測できる人もいた。教室のスタッフたちは、広報に力を入れなかったわけではないが、なぜか学習者が集まらなかった。今後は、新たな広報の手段も考えて、新しい学習者に来てもらうようにしなくてはいいけない。

日本語教育を行う人材の養成・研修の実施【活動の名称:「コミュニケーション」ってなに?】

目的・目標	講座の受講者はまず、コミュニケーションについての基本的な知識を学び、自身が行っている母語によるコミュニケーションを観察する。次に、よりよいコミュニケーションを行うためにはどうすればよいかを考える。そして、学習者とのような活動をすれば、学習者が日本語でコミュニケーションできるようになるかを考える。 本講座を終えた時、それぞれの受講者が「コミュニケーションとはこういうことだ」という自分なりの定義を持ち、学習者の日本語学習をサポートできるようになることを目標とする。									
内容の詳細	講座は、①コミュニケーションとは、②自分のコミュニケーションを観察する、③よりよいコミュニケーションのために、④学習者のコミュニケーションアップ作戦、の4つに分けた。 ①コミュニケーションとは ここでは、コミュニケーションの基本知識として、「コミュニケーションの概念」と「コミュニケーションの諸問題」を学んだ。 ②自分のコミュニケーションを観察する ここでは、自分の話し方を録音して特徴を分析したり、アクティビティをもとに自分のコミュニケーションの場面を振り返った。 ③よりよいコミュニケーションのために いまより円滑にコミュニケーションができるようになるために、聴き手を意識した話し方や、聴き手の感情に配慮した話し方などを実践練習をしながら学んだ。 ④学習者のコミュニケーションアップ作戦 日本語がわからない学習者の気持ちを知るために、受講者たちはフランス語の授業を受けた。そして、媒介語がない場合に使えるツールを考えた。また、初級の学習者を養成講座に招き、受講者が自作した教材による日本語学習支援を行った。									
実施期間	平成30年10月3日～平成30年12月5日				授業時間・コマ数		1回3時間 × 10回 = 30時間			
対象者	1日でもいいので、日本語学習支援の経験がある人。				参加者		総数14人 (受講者12人、指導者・支援者等2人)			
カリキュラム案活用	養成講座の第8日「ゼロ初級学習者に対しての初めての活動のための教材と実習の練習」で、学習者のコミュニケーション能力を伸ばすための活動を考える際、教材例集を参考に受講者に実践計画を作成してもらった。									
使用した教材・リソース	毎回、それぞれ担当の講師が作成したレジュメを使用した。									
受講者の出身 (ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
										13

養成・研修の実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	平成30年10月3日(水) 13:00～16:00	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	13	自分を知ろう、仲間を知ろう	・オリエンテーション ・アイスブレイキング 自分を知ろう、仲間を知ろう。	尾形文	櫻井久子
2	平成30年10月10日(水) 13:00～16:00	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	12	コミュニケーションの定義	・コミュニケーションってなに?	尾形文	櫻井久子
3	平成30年10月17日(水) 13:00～16:00	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	8	コミュニケーションの定義	自分の話し方を知ろう!	尾形文	櫻井久子
4	平成30年10月24日(水) 13:00～16:00	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	6	ボランティアのコミュニケーション能力を伸ばす	・話し方を練習しよう! 相手を承認する 質問の仕方を考える	尾形文	櫻井久子
5	平成30年10月31日(水) 13:00～16:00	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	10	ボランティアのコミュニケーション能力を伸ばす	・多文化共生について考えよう!	尾形文	櫻井久子
6	平成30年11月7日(水) 13:00～16:00	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	9	学習者のコミュニケーション能力を伸ばす方法を考える	・学習者に何を教えるべきかを考えよう!	池谷知子	櫻井久子
7	平成30年11月14日(水) 13:00～16:00	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	9	学習者のコミュニケーション能力を伸ばす方法を考える	・学習者の気持ちになってみよう! フランス語ゼロ初級学習者になってみる	池谷知子	櫻井久子
8	平成30年11月21日(水) 13:00～16:00	3	(公財)神戸国際効力交流センター会議室	9	学習者のコミュニケーション能力を伸ばす方法を考える	・ゼロ初級学習者に対しての初めての活動のための教材と実習の練習	池谷知子	櫻井久子

9	平成30年11月28日 (水) 13:00～16:00	3	(公財)神戸国 際効力交流 センター会議 室	9	実習	・初級レベルの学習者をゲストに迎えて、先週の授業と宿題で考えた教材を使って活動をした。	尾形文	櫻井久子、クリスチャンフロム、ウン チョンサン、オウ テイ、王 麗華、クリースク ビクトリア(キット)、ヒントノ コリーン、ジェニファー ホールラーレア、ジョディ パウエル
10	平成30年12月5日(水) 13:00～16:00	3	(公財)神戸国 際効力交流 センター会議 室	8	振り返り	・先週の活動の振り返りと、本養成講座の振り返りを各自で行い、その後クラスで発表し、それぞれの発表に対し、全員で意見交換をした。	尾形文	櫻井久子

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第3回平成30年10月17日】

〈自分の話し方を知ろう！〉

この日は、ペアでのおしゃべりを録音したあと、録音したものを各自で再生し、自分の話し方を分析した。

活動の目的は、相手にわかりやすい話し方について考えるためである。本養成講座の受講者の平均年齢が63.5歳ということで、若い時より発音が悪くなったり、声が通りにくくなったりしてはいないかということ、受講者自身で確認することで、今後どのような話し方をすればよいかを知る機会とした。

受講者たちは、日本語支援をするときだけでなく、日本人と話すときでも、まずは話し相手が聞き取りやすい話し方をすることが大切だというレクチャーを受けたあと、録音した自分の話し方を聴き、分析した。受講者からは、「思っていたよりも声が小さい」、「あの一が多い」、「変な笑いをする」などネガティブな意見もあったが、反対に「わりときれいな声だった」、「まだまだ声が出ている」などの意見もあった。

受講者たちは、各自の分析結果や感想を発表したあと、「気導音と骨導音について」や「発音をよくするためには」などについての講義を受けた。



○取組事例②

【第9回平成30年11月28日】

〈実習〉

この日は、日本語学習者を招き、日本語支援の練習をした。受講者たちは、第8回で各自が作成した、初級学習者のための教材を使って日本語支援をした。各受講者は、1回15分で学習者と1対1とする活動(写真左)を2回と、1回20分で複数の学習者を相手にする形式(写真右)を1回の、全3回の活動に挑戦した。

1対1の活動は、普段の日本語教室での活動で慣れていることもあり、どの受講者も笑顔で取り組んでいた。しかし、複数の学習者との活動では、そのような形態での活動経験がない受講者が多く、受講者からはほとんど笑顔が見られず、それにつられてか、学習者の笑顔もあまり見られなかった。

受講者たちは、各活動の前にその日に達成できる小さい目標を立て、活動後に振り返りをした。受講者からの振り返りでは、1対1の活動については、100%うまくいったわけではないが、ほぼ自分が思うような活動ができたという言葉が多く見られた。しかし、グループでの活動についての振り返りでは、「日本語に自信がない学習者には発話を促してもすぐには発話しないため、代わりに話せる人が話してしまうので質問の仕方の工夫が要る」、「3人の学習者に一度に教える場合、学習者のレベルに差があるときの活動内容に苦慮した」などの反省の言葉があった。

また、日本語支援の経験が浅い受講者からは「自分の前ではうまく質問が伝わらず困った顔をしていたのに、他の方との時間には楽しそうにされていて、あんな時間を作り出せる様になりたいなと思った」という言葉もあった。

3時間の実習を終えた受講者たちからは、「疲れた」という言葉が何度も出ていた。



(2) 目標の達成状況・成果

受講者には、毎回の講座の終わりに「振り返りシート」に、その日の内容、収穫、自分の変化、について記入してもらった。受講者たちは、毎回の講座内容や自分の行為について丁寧な振り返りをしていた。最終日のアンケートには、「会話と対話を考えるきっかけになりました。」、「大変刺激になりました。10回は長くて短かったです。」、「授業中に一人ずつ発言を促されているいろいろな人の意見・感じ方などが聞けて面白かった。」、「内容はとても濃く、脳をフル回転させ絞り出す感じの講座だった。とても充実した時間だった。」という感想があった。受講者たちが、今回の講座の目的である「コミュニケーションを知り、自分と学習者のコミュニケーション能力を向上させる」に至るには、もう少し時間が必要だと思う。

兵庫日本語ボランティアネットワークでは、これまで受講者たちに「自分で考えるボランティア」になってほしいと言い続け、自律的なボランティアの育成を目指してきた。今回の受講者たちの感想には、我々が目指してきたことが伝わったと感じられる言葉が含まれていた。本講座で得たことを少しずつ思い出しながら、日々の日本語支援をしていくうちに、コミュニケーションについても理解できると考える。

(3) 今後の改善点について

受講者から、実習時間をもっと増やしてほしいという意見が複数あった。しかし、協力してくれる学習者の確保が難しかったことから、10回の講座で複数日の実習を設定するのは困難だと考える。実習の回数を増やすことが無理なら、毎回の間隔をあげ、受講者が自身の日本語教室での活動を振り返り、養成講座で発表し、受講者間で意見交換をするような講座をすれば良いと考えている。

日本語教育のための学習教材の作成【教材の名称：『知っていますか。できますか。～日本語で話しましょう～』】			
目的・目標	本事業の日本語教室で使用する教材を作成する。 当日本語教室では、日本語を教えることを第一の目的にはしていない。教室では、学習者がこれまでに学んだ日本語を出す機会を設定することに注意を払っている。よって、本教材は、学習者の能動的な取り組みを促すアクティブラーニングを取り入れた内容とする。 平成28年度に当団体が実施した文化庁委託事業養成講座でアクティブラーニングについて学んだボランティアたちを中心に、教材作成メンバーを構成する。		
内容の詳細	本教材は次のような内容である。 教材は全4課である。 各課の最初に、簡単な「できます表」を置き、学習者が自分の日本語の上達を実感できるようにした。 各ページに「新しい日本語」という枠を設け、学習者が自由に記入できるようにした。 ボランティアの発話を控えるための工夫として、すべてを質問形式にし、学習者が自ら調べたり考えたりして、日本語で発話をする時間を増やすようにした。 目次 第1課 どうしましたか。(全5ページ) 第2課 もう少し大きいサイズはありませんか。(全4ページ) 第3課 まず、2つに切ります。(全4ページ) 第4課 じしん、かみなり、かじ、おやじ(全5ページ)		
実施期間	平成30年5月29日～平成31年1月26日	作成教材の 想定授業時間	1回 3時間 × 20回 = 60時間
対象者	ゼロ初級以外の日本語学習者	教材の頁数	20ページ
カリキュラム案活用	「標準的なカリキュラム案で扱う生活上の行為」のうち、特に日本語でのやり取りを必要とする項目を取り上げ、本教材を使用する日本語教室の学習者の生活に合った内容を考えた。内容を表出する段階においては、「教材例集」から使い勝手や見易さ、わかりやすさなどを参考に作成した。		
事業終了後の教材活用	・養成講座や研修会などで教材の紹介を行い、教材の存在を広めていく。また、当団体のHPへ教材のデータを掲載し、近隣の日本語教室のボランティアたちが入手しやすいようにする。 ・引き続き、当団体が開催する日本語教室で使用する。		
成果物のリンク先	兵庫日本語ボランティアネットワークのホームページ http://site.m3rd.jp/hyogo-nihongo-volunteer-network/		



4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

本事業は、2つのコミュニケーション能力の向上を目指すことから「コミュ・コミュ大作戦」と名付けた。1つ目の「コミュ」は、学習者の日本語によるコミュニケーション能力を指し、2つ目の「コミュ」は日本語学習ボランティア（以下、ボランティア）のコミュニケーション能力を指す。

地域日本語教育に通う学習者が目指すことの1つに、「日本語が上手になりたい」ということがある。初めて教室を訪れた学習者の多くが、このように言う。学習者たちは、日々の生活の中で、日本で生活をしていくうえで、日本語の習得がどれだけ大切かを痛感している。だから、来日して間もない学習者だけではなく、長年日本で生活をしている学習者も同様の目標掲げることが多い。

また、ボランティアたちも、教室の活動では、学習者の会話能力を伸ばすための支援をしなければいけないと考えている。しかし、ボランティアたちは、いまだに、どのようにすれば学習者が話せるようになるのか模索している。これは経験の浅いボランティアに限ったことではなく、長年にわたりボランティアを継続している人も同様である。ボランティアたちは、自分が担当する学習者の会話力が少しでも伸びるようにと、さまざまな養成講座などを受講し、支援方法を探している。が、実践で活かすことができず、再び養成講座などに参加する。ボランティアが学習者と教室で活動することも、コミュニケーションの1つである。まずは、ボランティアが、コミュニケーションとはなにかを知ることで、学習者と共有する時間をどう使うかがわかるのではないだろうか。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

【日本語教室】
学習者に対しては、最終日にアンケートとインタビューを行った。本教室は、断片的に実施してきたのだが、インタビューによりどの学習者も教室の継続を希望していることがわかった。このことから、本教室を実施した意義があったと判断した。

【養成講座】
受講者からは、養成講座の内容に関しては好意的な感想が多かった。目的が「コミュニケーション能力の向上を目指す」という難しいことだったので、すぐには効果は出ないと思われる。しかし、受講者たちからは、「大変刺激になった」、「授業中に一人ずつ発言を促されているいろんな人の意見・感じ方などが聞けて面白かった。」、「内容はとても濃く、脳をフル回転させ絞り出す感じの講座だった。とても充実した時間だった。」などの感想があったことから、養成講座を終えてからも考え続け、いつかは当講座の目的が達成できると考えている。

【教材作成】
ボランティアが話し過ぎることにより、学習者の発話時間がなくなる。それは、学習者が教室で日本語を練習する時間を持ってないということである。それを解消するための教材を作成した。使用したボランティアたちからは、日本語が少ないシンプルな教材なので、教えることに集中しなくなり、学習者と話す時間が増えたという感想があった。ボリュームが少ないので、今後はさらに足していかなければいけないが、学習者の発話を増やすという目標は達成できたと考えられる。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

本事業では、カリキュラム案を、主に教材作成に活用した。学習者がどのような日本語を必要としているか、また、どのような場面でどのような日本語を使用しているかなどが不明な時には、カリキュラム案を参考に、教材作成メンバーで話し合っ

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

・ひょうご日本語ネット
事務局（(公財)兵庫県国際交流協会）での月一度の会合を実施し、本事業への協力（広報など）を得た。この会合には、兵庫県国際課、神戸市市長、室国際部、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、民間団体、有識者が参加しているため、様々な機関からの協力が得られた。

・当団体の会員
会員教室に養成講座の実習に協力してくれる学習者を依頼した。また、当事業の日本語教室の学習者を確保する際、情報収集や広報などの協力を得た。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

・当団体の会員に募集案内を送付した。
・会員以外の交流のある団体（約30団体）に募集案内を送付した。
・当団体のHPに募集案内を掲載した。
・運営委員である（公財）兵庫県国際交流協会、（公財）神戸国際協力交流センターに広報をしてもらった。

(6) 改善点、今後の課題について

日本語教室については、他の日本語教室のように、継続的に実施してのではないことから、学習者の確保が難しいという問題点がある。入室を希望する学習者は少なくないのだが、期間限定の日本語教室であることがわかると入室をキャンセルすることもあった。教室開催時間が平日の午後1時から4時ということで、仕事をしている人には通えないということも、学習者が少ない要因だったと考えられる。今後も教室の開催に数を増やすことはできないので、常連の学習者の知り合いに声を掛けてもらうなどして、少しでも多くの学習者に来てもらうように努めたい。

養成講座に関しては、実習を希望する受講者が多かったが、実現は難しい。それに代わるものとして、ボランティアが自分の活動を振り返り、講座で発表をし、受講者間で意見交換をし、活動を改善できるような講座を開催したいと考えている。

(7) その他参考資料（携帯番号等の記載があるためHPへの掲載はしていません）

①日本語教室学習者募集のチラシ

②日本語ボランティア養成講座受講者募集のチラシ